



指揮

ダニエーレ・ルスティオーニ

Daniele RUSTIONI, Conductor



© Davide Cerati

1983年イタリア・ミラノ生まれ。同世代で最も魅力的な指揮者の1人であり、世界中の主要なオーケストラ、オペラハウス、音楽祭で重要な役割を担っている。現在メトロポリタン歌劇場首席客演指揮者を務めており、2026年4月に都響首席客演指揮者に就任する予定。

これまでにバイエルン国立歌劇場首席客演指揮者やフランス国立リヨン歌劇場音楽監督（現・名誉音楽監督）などを歴任。2022年、国際オペラ・アワードで「最優秀指揮者」に選ばれた。2024年7月にフランス共和国より芸術文化勲章シュヴァリエを受章。



© David Cerati

ヴァイオリン

フランチェスカ・デゴ

Francesca DEGO, Violin

多才さと説得力のある解釈、そして完璧なテクニックで賞賛されているヴァイオリニスト。これまでに、ロンドン交響楽団、バーミンガム市交響楽団スウェーデン放送交響楽団などと、ファビオ・ルイージ、フィリップ・ヘレヴェッヘ、ダニエーレ・ルスティオーニらの指揮で共演。熱心な室内楽奏者でもある。

近年の録音にはダリア・スタセフスカ指揮BBC交響楽団との『ブラームス&ブゾーニ:ヴァイオリン協奏曲集』などがある。使用楽器はフランチェスコ・ルジェッリ（クレモナ、1697年製）。

管弦楽

東京都交響楽団

東京オリンピックの記念文化事業として、東京都が1965年に設立し、2025年に創立60周年を迎えた。都響（ときょう）という愛称で親しまれている。

東京文化会館（上野）を本拠地として、オーケストラの演奏会を開催する他、交響組曲『ドラゴンクエスト』（全シリーズ）などゲーム音楽の演奏、教育活動や福祉施設での出張演奏など多彩な活動を展開している。



© Rikimaru Hotta

月刊都響

January 2026 1

ヤングシート

Young Seat

1/17 2026 (土) 会場 東京芸術劇場コンサートホール

第1033回定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.1033 C Series

指揮／ダニエーレ・ルスティオーニ
ヴァイオリン／フランチェスカ・デゴ

ブラームス：
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.77
(約40分)

リムスキイ＝コルサコフ：
スペイン奇想曲 op.34
(約16分)

レスピーギ：
交響詩《ローマの祭》
(約25分)

ホールでの過ごしかた

- ◎携帯電話など音や光を発するモノは電源を切りましょう。
- ◎演奏中は静かに聴きましょう！周囲の人も演奏を楽しんでいます。
- ◎公演中の録音・録画、写真撮影は禁止です。
終演後のカーテンコール時のみ写真の撮影が可能です。

東京都交響楽団



都響ヤングシートは、企業や団体からご支援をいただき、休日昼間の都響主催公演を中心に青少年と保護者をご招待し、オーケストラコンサートをお楽しみいただいています。
ご支援企業については月刊都響をご覧ください。



【Program Notes】プログラムノート

今日のコンサートでは、イタリア出身の指揮者ルスティオーニが登場。大編成のオーケストラが色彩豊かな音楽をたっぷりと響かせます。

ブラームス： ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.77

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）が作ったこの《ヴァイオリン協奏曲》は、ベートーヴェン、メンデルスゾーンの作品と共に「三大ヴァイオリン協奏曲」と呼ばれる名曲です。

ブラームスがこの曲を書いたのは45歳のころ、1878年の夏です。オーストリアのペルチャハという湖と山に囲まれた町で過ごし、自然の美しさに力をもらなながら、たくさんの曲づくりに励みました。この夏の間に、交響曲やピアノ協奏曲などの大作も書き始めています。

この協奏曲の背景には、ブラームスの親友で名ヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムの存在がありました。二人は長く音楽で支え合ってきた仲で、ヨアヒムは「ブラームスのヴァイオリン協奏曲を弾きたい」とずっと願っていました。ついに作曲を始めたと聞くと、ヨアヒムはすぐにペルチャハを訪れ、曲の細かい部分まで一緒に相談しながら仕上げていきました。1879年の元日には、ヨアヒムの独奏、ブラームス自身の指揮で初演が行われ、大成功をおさめました。

曲は3つの楽章からできています。第1楽章は力強くドラマチック。オーケストラとヴァイオリンが会話するように進みます。第2楽章はオーボエのやさしいメロディーが心にしみる静かな音楽。第3楽章では明るく元気なリズムにのって、独奏ヴァイオリンの華やかな技が発揮されます。



Johannes Brahms

リムスキー＝コルサコフ： スペイン奇想曲 op.34

ロシアの作曲家リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）は、オーケストラで色彩豊かな音楽を描く達人です。音楽院で約40年にわたって教え、多くの作曲家を育てました。彼が書いた管弦楽法（オーケストラの楽器の使い方）の教科書は、今も世界中で読まれています。

この「スペイン奇想曲」は1887年の夏に作曲されました。スペインの民謡集から旋律を取り入れたこの作品は、もともとヴァイオリン曲として構想されましたが、オーケストラのほうが魅力を



Nikolai Andreyevich Rimsky-Korsakov

生かせると考え、管弦楽曲に仕立てられました。初演は大成功で、リハーサルから楽団員が拍手を贈り、本番では聴衆がアンコールで全曲の再演を求めるほどです。

曲は5つの部分が続けて演奏されます。第1曲「アルボラーダ」は朝の目覚めを告げる華やかな舞曲。第2曲「変奏曲」はホルンの美しいメロディーで始まり、さまざまな楽器がその旋律を奏でます。第3曲は第1曲と同じメロディーを、楽器と調を変えて新鮮に響かせます。第4曲「情景とジプシーの歌」では、トランペット、ヴァイオリン、フルート、クラリネット、ハープなどが次々と音色を披露。第5曲「アストゥリアスのファンダンゴ」はカスカネットのリズムに乗った舞曲が情熱的に盛り上がり、華やかに幕を閉じます。

レスピーギ： 交響詩《ローマの祭》

リムスキー＝コルサコフからオーケストラ音楽の書き方を学んだのが、イタリアの作曲家レスピーギ（1879～1936）です。1900年、21歳のレスピーギはロシアのサンクトペテルブルクに行き、リムスキー＝コルサコフに色彩豊かな管弦楽法を教わりました。当時のイタリアといえばオペラが中心でしたが、レスピーギは華やかな管弦楽曲を次々と発表して、器楽の新しい時代を切り開いたのです。

《ローマの祭》は1928年に完成した作品で、彼の《ローマの噴水》《ローマの松》に続く「ローマ三部作」の最後を飾ります。曲は4つの部分からなり、古代から現代までローマのさまざまな祭りの情景が描かれます。第1曲「チルチェンセス」は、古代ローマの大競技場で行われた猛獣と人との壮絶な戦いを描く、緊迫感あふれる音楽です。第2曲「五十年祭」では、長旅を続けてきた巡礼者たちが丘の上にたどり着き、聖地ローマを一望して古い讃歌を歌い、教会の鐘の音も響きます。第3曲「十月祭」はブドウの収穫を祝うお祭りです。狩りの合図や、マンドリンが伴奏する愛の歌も聞こえる美しい音楽です。そして第4曲「主顯祭」は、クリスマスの時期に広場で繰り広げられるお祭り騒ぎ！ダンスの音楽や手回しオルガンの音、酔っ払いの歌、物売りや大道芸の賑わいが表現され、大編成のオーケストラによるド派手なクライマックスで締め括られます。

文／飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）



Ottorino Respighi

公式SNSでも情報を発信しています！

都響

検索



<https://www.tmso.or.jp/>

どこでも都響の演奏が楽しめる！
ご覧いただくとともに、チャンネル登録もお願いいたします。

都響公式 YouTube チャンネル

